

## 簡易版アカデミック・ポートフォリオを活用した 作成ワークショップの実践

松本 高志\*, 小松 実\*, 川畑 成之\*, 山田 耕太郎\*, 太田 健吾\*, 菊池 弥生\*\*

\*阿南高専創造技術工学科, \*\*阿南高専教育開発推進室

### 1. はじめに

阿南高専は、2014年度の文部科学省大学教育再生加速プログラムテーマⅡ（学習成果の可視化）に採択され、教育改善に取り組んでいる。その取組のうち教員のアカデミック・ポートフォリオ作成を取組4本柱の1つに位置づけFD活動として推進している。アカデミック・ポートフォリオ作成は2012年3月に初めて2日半のワークショップから始めたが、参加者に負担感が大きく、参加阻害要因になっていると考えられた。そこで、簡易版のワークショップを導入し、振り返りを重視しつつ日程を短縮したワークショップとして実践した。本報告は、このワークショップ実践をもとに報告する。

### 2. ティーチング・ポートフォリオからアカデミック・ポートフォリオへ

阿南高専は、2012年3月からティーチング・ポートフォリオを導入している。ティーチング・ポートフォリオは「自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様なエビデンスによってこれらの記述を裏づけた教育業績についての厳選された記録」である<sup>1)</sup>。ティーチング・ポートフォリオは、1990年代に北米で急速に広まり、現在は2000以上もの大学が採用していると言われる。アメリカではデニュア（終身在職権）制度の審査時に教育業績資料として提出することが多いと言われている<sup>2)</sup>。阿南高専が実施しているティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップのスケジュールは、米国で実施されているものとはやや異なり、東京大学大学総合教育研究センターの栗田氏が日本に適合する形式として再構成したものである<sup>1)</sup>。

このティーチング・ポートフォリオの取組は、

順調に進展し、2012年3月までに全教員の8割がワークショップに参加してティーチング・ポートフォリオを作成できた。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）と連携しながら、四国地区の高専に展開し、各高専における作成者を増やすこともできた。このような背景から阿南高専では、教員のFD活動であるティーチング・ポートフォリオ作成を一步進めたアカデミック・ポートフォリオ作成を大学教育再生加速プログラムのひとつの柱として取り組んでいる。

アカデミック・ポートフォリオは、高等教育機関の教員にとって業務の3本柱と言える教育、研究、サービス活動のバランスとその有効性を自己省察とエビデンスによって明らかにするものである。米国の第一人者である Seldin 氏によると、人事評価にも教育改善にも活用できるとされている。アカデミック・ポートフォリオはティーチング・ポートフォリオを部分的に包含することから、近年はアカデミック・ポートフォリオが広まりつつあるようである。アカデミック・ポートフォリオの一般的な概念を図1に示す。ワークショップの最後に実施する成果発表の際に同図を提示してもらっている。

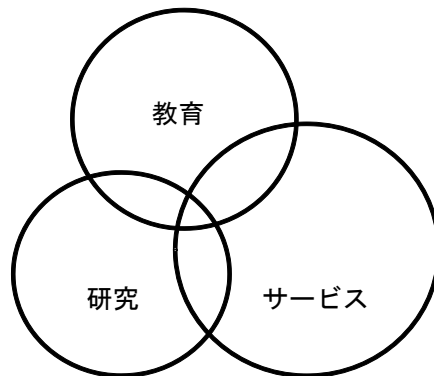


図1 アカデミック・ポートフォリオの概念

### 3. 簡易版アカデミックポートフォリオ

栗田氏らは構造化アカデミック・ポートフォリオ (SAP) 作成を提案している。これまで、日本における AP 作成ワークショップは TP を作成した者を対象として実施してきたが、ワークショップを 2 回参加しないと AP を作成できないため、参加者の利便性は良くない。そこで初めから AP を作成できるようにフォーマットを整理して、インストラクションの順番を考えていけば AP が完成するというシステムである。また、栗田氏らは教員の全活動を含む教育、研究、サービス活動の振り返りを 1 枚のシートに整理できるワークシートである SAP チャートを提案している<sup>3)</sup>。この SAP チャートは標準的に 3 時間で作成するワークシートである。阿南高専ではこの SAP チャートと図 1 を作成することで、教員としての振り返りを重視しながら現在の教育、研究、サービス活動のワークバランスから目標を明確にするワークショップを全教員対象に実施した。

### 4. 事後アンケートの結果

事後アンケートの結果 (回答数 40 件) を図 2 に示す。これらの結果から、教育・研究に比べてサービス活動の振り返りについて評価が低い。この要因としては、サービス活動の振り返り時間の配分が少なくなってしまうことと、若手教員はサービス活動が少なくあまり書けなかったためと考えられる。全体で 3 時間確保する必要があると感じた。簡易版では最後に図 1 のベン図を作成してもらうことにより、現在の教員活動のエフォート割合も認識し、将来目標を立てている。これらによって現状把握 (C) から始める PDCA 教育改善が現実的に機能しやすくなると考えている。

### 5. おわりに

簡易版アカデミック・ポートフォリオによってほぼ全教員に教員の全活動について振り返る機会を設けることができた。阿南高専は、アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップは今後も継続して開催する予定である。

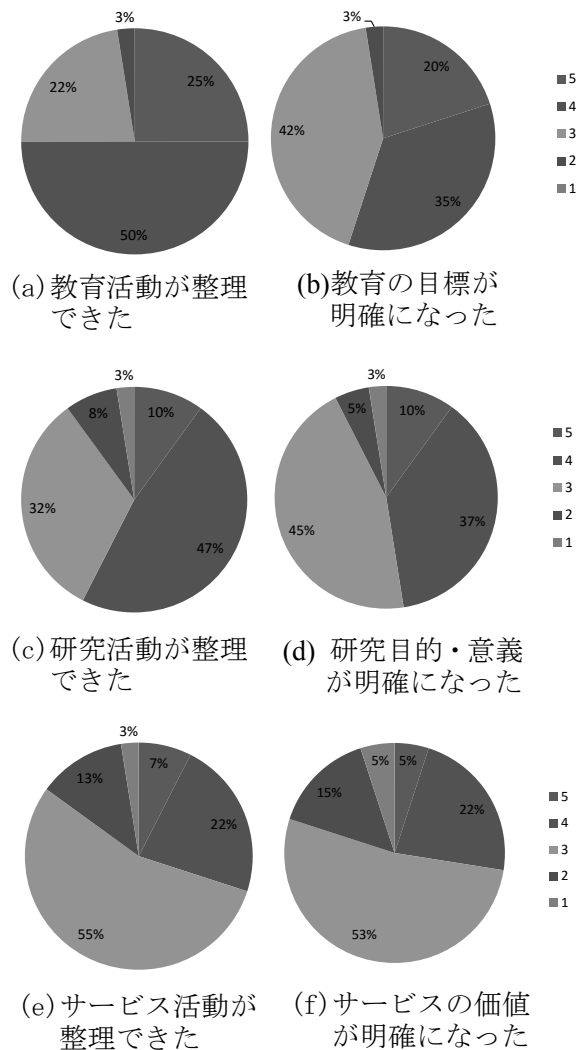


図 2 事後アンケート結果

### 参考文献

- 1) 独立行政法人 大学評価・学位授与機構：日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題-ワークショップから得られた知見と展望-, 評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書 (2009)
- 2) ピーター・セルディン著, 大学評価・学位授与機構監訳, 栗田佳代子訳：大学教育を変える教育業績記録, 玉川大学出版部 (2007)
- 3) L. Yoshida, K. Kurita, "Evaluation of Structured Academic Portfolio Chart and Workshop for reflection on academic work", *Procedia Computer Science*, 96, pp. 1454-1462, 2016.